宗像

毎月一日発行
定価一年 送料共500円
発行所
宗像大社社務本局
福岡県宗像郡玄海町
電話 神湊26番

宝物館完成まで一息！

――建設工事着々進む――

去る九月号に当宝物館建設について「宗像大社宝物館起工式」と題して大々に御紹介したが、其の後天候にも恵まれ、資材の需給関係もスムーズに運び、大体予定通り進んでいる。

「今のところ、工事予定は順調に進んでおります」

と現場監督である清水組の大蔵氏も満足気に云っている。

既に左側の収蔵庫部分はコンクリート打ちを終り、右側の展観室部分のコンクリート打ちの日も近い。建設工法は最も近代的な方法を採用しており、既に内外装工事の段階になっている。朝早くから夜は遅くまで電灯の下で黙々と立働いている工事関係者の姿が尊い。

「私共、一生の間建設工事に従事しておっても、今度のような宝物館を建てさせて貰う機会など滅多にありませんですから、有難いことだと思っています。」

若い大蔵さんは希望に満ちた表情でいつもこういう。

設計者の芸大伊藤要太郎氏も二ケ月に一度位の割合で、現場に来て、あれこれと指示をして行く。

建設委員長である出光泰亮氏もこれ迄五回程わざわざ東京から見えている。

清水建設の伊藤課長は現在新博多駅建設の現場責任者である忙しい身体を度々運んでいる有様である。

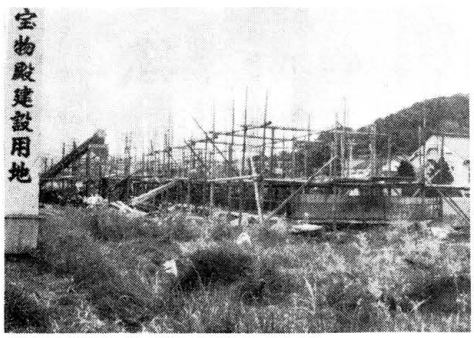
久保宮司はこれ亦忙しい社務の傍ら連日のように募金運動にかけずり廻っている。まことに寧日無き有様とはこのことをいうのであろう。最近ではますます熱が入って来ている。はたの者が健康を気遣っておる。自ら「信念の鬼」だなどといって張切っている。かえって毎日のように自動車を運転している若い葦津祢宜の方が「宮司さんの元気なのには驚いてしまう」といっている位である。

初冬の空に今日も建設の音がたくましく響いている。氏子、崇敬者、篤信者、それに今度の建設に対して御寄附をされた人々の熱誠と善意に守られて、今や宝物館の全容が現出せんとしている。また先程も述べたように、直接、間接に建設工事に携っている人々の熱意のほどが力強い。

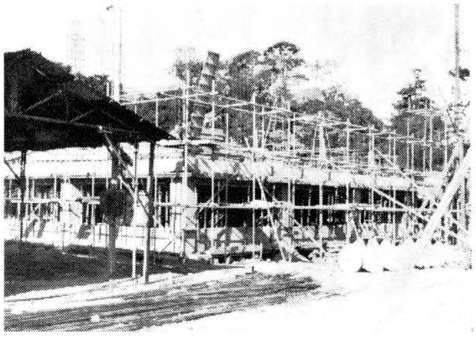
この分で行けば、予定の来年三月には宝物館の建築部分は間違いなく完成するであろう。今、初冬の陽の中にそびえる外廓を見てさえ、事ここに至る迄の経緯がかえりみられて感慨無量なるものがある。今にして宗像大社の神宝とそれに関連する太古からの信仰の在り方、ひいては当大社と国家民族との在り方、そして結局はわが宗像大神の御神徳顕現のことを図るのでなければ、このような機会は永久に訪れないのではあるまいかと思われる。かくなり来ったのも、つまりは「御神慮」であろうと拝察される。御神慮を畏んで神職がはげむ所に地域社会の信仰活動が起り、新時代の氏子結成がなされるのではなかろうか。そうなくてはならない。

一つの機運を醸成し、一つの機会が得られた時に、一社の活動が総力をあげて、それに集中されることが望ましい。今の宗像大社がその時機に立ち到っているといってよいであろう。

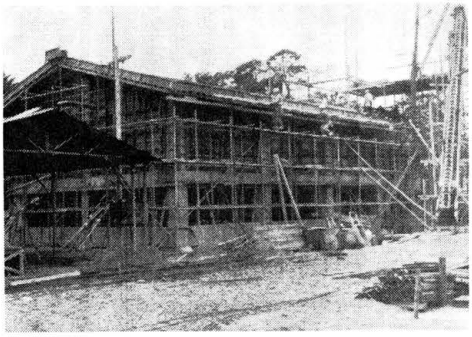
ここに大方の御協賛を衷心より感謝申し上げて、以上宝物館建設工事の中間報告とする次号である。



―― 土台コンクリート打込み ――



―― 土台部分完成 ――



―― 外廓出来上り、中段の処が土台になる ――

宗像大社御用達
装束神具
松島神輿製作所
京都市下京区北小路通新町西入
電話 (37) 八八六九番
振替口座京都一五八九一番

宝物館建設募金事業について

上掲の通り当社宝物館は其威容を出現しつつあるが、之が建設には各地から暖かい御支援を戴いている。目下浄財を寄せられている所は、宗像郡町村長会、氏子会有志、西日本鉄道、清水建設、日立製作所、八幡化学、内山緑地建設、福岡銀行、西日本相互銀行等で、外各会社も夫々応分の御支援を約されているが、未だ目標額に到達していない。

小口の寄附金は、本紙を通じて一昨年頃から御願いしたところ、多くの篤志家より御芳志を戴き、現在では相等額にのぼっている。

工事の進捗状況については本欄に述べた通りであるが、来年三月に建物が出来上っても周辺の埋立て工事と附帯設備についての資金については、これからの問題にかかっている。此の際、関係者はじめ、篤志家各位の熱意が何とかしてその実を結び、千載に伝えて恥しからぬ成果を揚げられるよう期待してやまない。

ここに改めて読者各位の御理解と御支援をお願い申し上げる次第である。

正月祭・交通安全特別祈願祭のお知らせ

元日　国家隆盛祈願祭
二日　産業文化振興祈願祭
三日　家内安全祈願祭
一日←十五日　交通安全特別祈願祭は元旦から十五まで毎日致しております。

論説　先生とその弟子

慶弔言図は人間の生活に附きもの。祝福と弔問は人情発露の極めて自然の儀礼である。常識人は何人もこの範疇の外にはなかろう。恩師の還暦を迎えた。親友が学位を得た。役員が過労に倒れた。いずれも祝つべく、いずれも慰むべく、関係者が発起することは当然のことのように見える。又何等異論を唱える余地は分もない結構すべかの趣意である。然し意義のない名言麗句の趣意書を、ありがたく拝誦したからと言って、悉く賛同するには若人のたずさわる現実の事情が錯落なく応ずべしとは許してくれない。日常の厳しい現実は空疎な辞句では片附けられぬ。

何と多い慶祝と弔意の趣意書の配布であろうか。何と数きれぬ結構づくめの強制された発起人名簿であろうか。

知らぬ間に発起人となり、愚名を拝借されて実行委員となっている。これでは慶弔をうけた先生が泣くのではないか。

学徳は讃えたい。功績は顕わしたい。然し見たことも聞いたこともない先生の還暦古稀に、広く趣意を伝えて金一封を求める側近門下の心なき愚行に驚き入る。いくら多くの金品を集めても、先生自身何等片鱗も知らぬ人の祝意、お義理で仕方なく作られた記念品を、心から感激の謝辞を述べる気持になろうか。弔問の場合も同じだ。一部のほぼ者が特定の個人の病気見舞金募集にフンキする。勿論悪いことではない。如何に多くの功労者が慰労の弁を聞くことなく、老躯の身を再起不能の冷床に横たえているろうか。それをすべて祝し、それをすべて手厚く見舞う方途のないこと挙げるまでもない。実生活は辛く、すべてに行き届いた挨拶を欠かない為にはあまりに事が多過ぎる。

取り巻き連中、愚願の門弟子、或は時に見つける太鼓持ちのへつらい者、先生を馬鹿にしているのは諸君ではないか。心から先生の業績と長寿を祝い祈り、心から先輩の非境を慰める真情があるなら、集る金員の多寡は問題ではない。何故貧者の一燈を捧げても、場合、若しくは知っている人でも、名前だけを見て知らぬ人のくだらぬ意図や発起者の売名と思ったときはカシワ。候補者某君が不公明選挙の功あって議員バッジをつけると先生に変る。「難波の葦」は伊勢の浜荻、所変れば品変る」名は大切なものであろう。名を惜しむと言いながら悪い事をするのが人間の習性であろうか。○金持の奥方は謙遜の言葉を挨拶に述べながら、ダイヤの指輪を誇示する。役人の夫人は無能な主人と卑下しながらその学歴に秀才ぶりをにおわす。閣下の未亡人は浮世を捨てた静寂な境地にあると見せながら極華やかなり頃の家庭史を物語る。背後に亡者が微笑する。○無理な背のびをしてはならない。自己の力量を知り、その八割でやれる地位に止まれば安泰であり、綽々たる餘裕がある。実力以上の地位を望むな子弟を戒めてみたが、さて。○師走となる流年浪士の快筆を想う。一年の終を物に結ぶ者、一生の幕を心に閉じる者。世はさまざま。

（白雲）

阿蒙少言

歳末が迫ってくると、妻君の物質慾が増大する。「隣のご主人は部長になられたョ、立派な車が毎朝迎えに来るワ」閨房の物質慾と虚栄心は亭主の出世主義を刺戟する。ここに悲劇の原因があると覚れば男子処世のコースは順調であろう。先ず妻君の教育が肝心だが、これは優れた伯楽にならねば難しい。○玄宗皇帝はじめ英傑も楊貴妃の傾国の媚態に迷い安禄山の反乱予備行動を読みとる心眼を失った。失政汚職破滅への転落は女姓の憎悪偏愛虚栄に起因する場合が少なくないことは、クレオパトラや建礼門院が史書に語ってくれている。ところで現代を生きる男性はどうするか。家庭生活にも勇気と判断は必要欠くべからざるもの。○泳いでいる頃のイカは陸に揚げられ乾物になればスルメ、鳴いている姿は鶏だがスキ焼になるときはカシワ。候補者某君が不公明選挙の功あって議員バッジをつけると先生に変る。「難波の葦」は伊勢の浜荻、所変れば品変る」名は大切なものであろう。名を惜しむと言いながら悪い事をするのが人間の習性であろうか。○金持の奥方は謙遜の言葉を挨拶に述べながら、ダイヤの指輪を誇示する。役人の夫人は無能な主人と卑下しながらその学歴に秀才ぶりを捨てた静寂な境地にあると見せながら極華やかなり頃の家庭史を物語る。背後に亡者が微笑する。○無理な背のびをしてはならない。自己の力量を知り、その八割でやれる地位に止まれば安泰であり、綽々たる餘裕がある。実力以上の地位を望むな子弟を戒めてみたが、さて。○師走となる流年浪士の快筆を想う。一年の終を物に結ぶ者、一生の幕を心に閉じる者。世はさまざま。

（白雲）

第三三回　宗像大社献詠歌会詠草

十一月三日　於社務所詠草到着順

小倉　大和　虎雄
参詣人の等の歩む埃のみタクシーなどは無き世なりしも（放生会）

岡垣　早川藤九郎
あかつきに高知市を出て道すき土佐の海辺を室戸岬にゆく

内殿　岩崎　和荘
宗像の大社の祭命ありて拝みまつることのうれしさ

人吉　久羽　博史
松並はくろくしづかに時に耐へ月のひかりに冷えゆく生身

村山田　吉田佐一郎
君を知るゆかりや深き緑荘遠き平戸の旅の空にて

福岡　高橋　昇
菊の香に明治しのばむ友たちの残り少なになれる今日の日

神湊　隣船　俊
神風を仰ぎて崇し幡の色海厳かみあれのみ船

津屋崎　麦野　時雄
秋雨のはれしばかりの海原は朝日に映えて藍の色濃き

戸畑　田中ハツセ
突堤に波しぶきよけ沖を行くみあれ祭の船を見守る

勝浦浜　永島　文子
商売気さしき吾が性いかにせむ間引菜の山に独りとまどふ

名残　竹原　圓
破産せし友の保証にたちてるる今宵の集い心おもたし

宮田　片山　朝子
一群の真紅のダリヤが垂れ咲けり病み疲れ目に泌みるその色

〃　片山　一
朝露に叩の花光る垣にそひ雨に洗へる道を歩み来

戸畑　伊規須ゆき
大小のプールの門のテープきられ村人の歓喜胸熱くきく（吉武校プール開き）

東郷　小野角次郎
釣りはサーカス団の囃子らし今日放生会の賑賑着続くも

〃　小野　花居
かりそめの句作と思ひ五年を心ゆたかに楽しかりけり

大濠　江崎　琴子
月今宵銀のさざなみたゆたへる濠のあたりをそぞろあるきぬ（明月）

大濠　東郷　藤崎　辰子
湯の駅に黄花ぬれて筑紫路の旅に名残の煮笛一声

深田　中野　節子
カリエスで仰臥十七年の君が臨終児に似たり起してやりたし

田島　力丸　登
明日の天気を案じつつ刈干稲田北の空に浮雲ぞわく

東郷　安部　重郎
夜を帰る露の小径に星の降る星座のロマンあれこれと楽し

〃　安部　静子
稲を刈る古里人も老いにけり進み行く世のいしづえと生きて

福間　中村　吾郎
世の邪魔になりて生きるる我よりも虐しかりし君の戦死は

宮田　北原きみ子
遠くより刈り広げたる秋の田の乾く匂ひの稲結び急ぐ

吉武　高山徳七郎
秋の陽は浮雲おきてうづ高し広田くんに黄金波寄す

福岡　林　まつえ
青島のピロー樹は昔に変らねど地平線のみどりはかくも深かりしか

戸畑　山磨　昌子
静寂なる極みとなりし山宿になごむ主婦連の声はすみ合ふ

武丸　立石　昇
初なりの無花果の実をいとしみ幾日を待てど遂に育たず

江口　辻野　開造
移り行く世相に解せぬ事多し朗治生れの我にしあれば

村山田　金丸　柳蔵
畦豆を引けば熟れたる莢はじけ赤き小豆のをしく落ちけり

若松　大高　岩吉
青々会員帰り旅行温泉へ歌ひ踊りて一日楽しく

南郷　井上陽之助
すみわたる陽さしに子等の飛びあそぶ野菊咲く原薄ぞ光る

内浦　長畑　房江
極まりし喜びの後秋の夜逝思ひ出ては涙をこぼす

吉田　占部　由久
なき夫が植ゑおきし栗の秋ことに笑みこぼれては孫らよろこぼす

勝浦　永島　計七
三党首の討議に聞く施策にも現代日本の諸相知らるゝ

東郷　藤崎　辰子
湯の駅に黄花ぬれて筑紫路の旅に名残の煮笛一声

深田　中野　節子
カリエスで仰臥十七年の君が臨終児に似たり起してやりたし

田島　力丸　登
明日の天気を案じつつ刈干稲田北の空に浮雲ぞわく

東郷　安部　重郎
夜を帰る露の小径に星の降る星座のロマンあれこれと楽し

〃　安部　静子
稲を刈る古里人も老いにけり進み行く世のいしづえと生きて

福間　中村　吾郎
世の邪魔になりて生きるる我よりも虐しかりし君の戦死は

宮田　北原きみ子
遠くより刈り広げたる秋の田の乾く匂ひの稲結び急ぐ

吉武　高山徳七郎
秋の陽は浮雲おきてうづ高し広田くんに黄金波寄す

福岡　林　まつえ
青島のピロー樹は昔に変らねど地平線のみどりはかくも深かりしか

戸畑　山磨　昌子
静寂なる極みとなりし山宿になごむ主婦連の声はすみ合ふ

武丸　立石　昇
初なりの無花果の実をいとしみ幾日を待てど遂に育たず

(オ三種郵便物認可)

一寸話が難しくなるが——

人生の実相について明らかな認識のないのを〝無明〟という。然も人間はすべて無明であるというのが仏教の定義である。この無明であることを先ず知り、無明に目覚める所に解脱がある。釈尊は無明を有明にする為の道を拓いた。そこに仏教が生まれたということができる。

無明の迷いを払うのを明王の剣という。明王の剣は自力で解脱をはかろうとする者の心に形成される。自己の中に智慧の光を光らせれば、超越神を頼らなくてもいい。自燈明自帰依を自途として大乗仏教が我が国に流布した。これが禅宗系統の仏教の行き方であった。

さて、その昔、大徳寺の古溪の弟子に千利休があった。彼が秀吉に死を命ぜられて割腹してたのは既に七十二才の時であったが彼の遺偈が傑作である。

人生七十
力喝希咄（力、喝、嘆き咄）
吾這宝剣（わがこの宝剣）
祖仏共殺（祖仏共に殺す）

彼は有明の心境であったから、明王の剣を持っていた。故に死に望んでの自覚があった。祖師も仏も否定して死ぬことのできたのが彼の最後の姿であった。

この利休（宗易）が確立したのが〝茶道〟であったら利休の茶道には彼の遺偈の精神、徹っていたと思われる。「茶神一味」ということが云われるのはこの為であろう。

支那の禅はモラルを基準としている。日本の禅には茶が生まれた。茶室が禅堂に通ずるのはこの為である。茶道は禅の生活化であるといえよう。従って茶道の精神は禅生活に於ける厳粛なる〝清規〟を根本とする。東洋的無を禅に於ける生活表現として過言ではあるまい。

茶道は日本独自の芸術である。あらゆるものを芸術化——道にしたがるのが日本人であるが、禅生活、即ち茶道でさえあったものを、日本人は日常生活、即ち宗教の生活を離れた日常生活に取り入れて芸術化した。これは、最初に東庭、掛物、花等々、広い分野に文化を齎らした茶道が、近代に於て豪華になったことを、利休やその弟子達が、茶道の道を拓いた。

宗像談話室　わびの芸術

「茶道」であらわしたといっても法にとらわれず、無禅神からして極度に簡素化し、芸術化した茶道が、日常の芸術化としての茶道になったことは、時代を経るに従うになったのに似ている。形、作

って仏教の辿った道と、その軌を一にしているといえないであろうか。そして、建築、焼物、菓子、蒔絵、掛軸、花等々、広い分野に文化を齎らした茶道が、近代に於て豪華になったことを、利休やその先輩の珠光が喜んで見ているであろうか。疑問なきを得ない。

戦国武士といえども茶室には丸腰で入ったという。一歩外へ出た時に生命の無いことを覚悟する為に茶をすすったであろう。剣禅一味がここにあった。

〝わび〟とは天地自然を観照することであると思う。極度に簡素化された茶道の境地がこれであった。茶をすすり乍ら思うことは〝わび〟でなくてはならない。

「お点前なくてはならない。」

では茶道が見世物になる。茶道は曲芸ではない。

茶道は天地の時間の経過を自然観に感ずる。従って「やり直し」は無い。水の流れるが如く自然に経過することを尊しとする。

茶道を習いたい人が沢山ある。お点前を立派に行なうことは一つの機縁になるから、大いに結構だが、茶道を学ぶことは己れの心に燈をともす種、手段になるのだということを心掛けて貰いたい。路の掃除をし、道具の塵をはらい、茶室の掃除に心をこめることが大切だということ、それが茶道の「行」であることを知って貰いたいと思う。

のめば事足りるのが茶である。本当のことを習わぬことを「裏物」という。唯単に「結構なオテマエ」のみを習うのならば、始めから観に感ずる。従って「やり直し」らやらぬ方がいい。

沖の島灯台記念日

沖津宮日誌

昭和三十八年十一月一日　晴

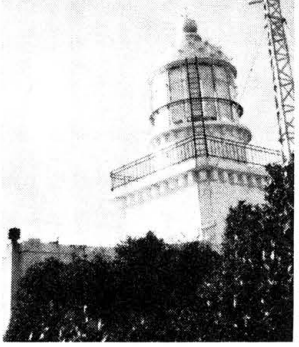
一、午前九時月次祭斎行

一、本日灯台記念日につき沖之島灯台より招待さる。

後略

以下は、この日の沖之島灯台に於ける灯台記念日に出席した当社職員の手記である。

海は藍色にそまっていた。その色が水平線の彼方から薄黒色に変る頃、春色が島の谷間から頂きにひたひたと押し寄せて来る。と今まで静寂を保っていた灯台に、ぽっと明りが灯り、大レンズがくるくると廻転して白赤の光芒が闇に吸込まれて行く。明治三十七年四月、この海北道中いやはての沖島沖之島一ノ嶽山頂に灯火が点ぜられて以来七十幾星霜、一日の休みもなく神行く船人等に希望と喜びの光を投げ続けて来た灯台は、今日もまた大きく鼓動を打ち活動を始めた。想いを廻らせば国初よりこのかた神霊の宿りますこの島は、この国の歴史に光を点じ、国の歩む道を照し続けて来た。又今日この島の灯台は人の世に明るい光を点じ来っている。海に生る人、灯をかかげる人、この両者の志すところは帰する所に於て一体をなしている。



灯台員の宿舎の方から賑やかな歓声が聞えて来る。祝賀が始まるらしい。集る者灯台員、漁夫、神職合せて八人。且つ食い且つ飲み遠近の灯台の話を聞きその生活の厳しさに胸たれた。若い灯台員がぽつりとぶやいた「吾々を支えているのはただ一つの使命観だけだ」という言葉は時が経つに従って胸に泌みわたり、耳に木魂して消える事がない。

人世行路難し。拳を挙げ回天の事業をなすもよし、亦一人孤灯を守りはるけき海路を照すも夫丈夫たるものの一大事業である。

大漁祈願祭

——沖ノ島出漁仲間——

十一月十五日午前八時三十分、沖津宮に於て沖ノ島出漁仲間による大漁祈願祭が厳粛に斎行された。

祭主は折から沖津宮に勤務中の小野権宮司、参列者は同仲間の大船頭を始めとする全員三十六名であった。

祭典の前後に、小野権宮司から参列者一同に対して、「神島沖ノ島」に関する話があり、一同改めて「お言わず様」の尊厳について認識を新にした。

「この島の神域を保持し、尊厳を高め、御神徳をあらわすのには、すべてこの沖ノ島様をお守りするあなた方の信仰の在り方にかかっているのです上」

と話を結んだ時に、漁師たちの顔に一瞬感激の表情が見られた。

今年も、沖ノ島漁場には、一面に秋刀魚が湧き、それを追いかける鰤の飛沫が見られる。

沖ノ島様を信仰し、沖ノ島漁場に生きる「仲間」の人達の幸せを願ってやまない。

寂果てて帰途につく。空を仰げば光芒が一閃し闇の中に北斗がきらめいていた。

—写真は沖島港　向うは小屋島—

十二月祭事表

一　日月次祭午前十時

一五日古式祭午前六時

実質的な新嘗祭ともいうべき行事で、祭典後清明殿に於て古式による「御座」が開かれる。祭典の神饌は古式による特殊神饌（菱餅、九年母、ゲバサモ）等が捧げられる。

お座の方でも新莚に坐って忌穢の刺立てられた御飯を栗の茎でいただく。神に新穀をお供えして人も共にいただくという神人相嘗の厳粛な行事で、当社では建治元年（一二七七）の社記以来約八百年の伝統をもつ。わが国最古の「お座」の一つである。

一五日　鎮火祭　午前十時

郡内消防関係者が参集して「火じつめのまつり」を行う。実際に拝殿で神饌の手によって古式の形通りの消火が行われる。

三一日　大祓式　午後五時

一年の後半期の終にあたり、しらずしらずの間に犯した罪や穢れをお祓いし、過ごし一年間の反省を行う行事。郡内外から集められた数万の人形ひとがた、個人の姓名をかいて息をふきかけたものがお祓いされる。これによって来るべき新年を清々しく迎えるわけである。

三一日　除夜祭　午後六時

すぎし一年を送るにあたり静かに来しかたをふりかえり、来るべき新年をおごそかに迎えるために、心を鎮めて大きくは国家の繁栄のこと、世界の平和のことを祈るあみずからも沈思黙考するのによい機会である。

十二月の交通訓

見よ見よ、よくよく見よ！

社務日誌抄

十月一六日　宗像護国神社鎮霊祭斎行。

一七日　宗像護国神社御鎮座大祭並郡合同殿霊祭斎行。

一九日　神社本庁庁本教学部長来社。

二二日　福岡学芸大学起工式。

二四日　出光佐三氏外四名参拝。

二六日　養父嘱託若賀海神社大祭奉仕。

二六日　玄海ゴルフ場開場式。小野権宮司、楠本、斎藤副権禰宜奉仕。日之出石油瓦斯社長中津井氏参拝。

二九日　宇部市交通局宗像神社祭宇都宮禰宜出向。

三〇日　中津宮秋季大祭斎行。出光

十一月一日　月次祭斎行。出光

秦亮御夫妻、西鉄副社長楠根宗生氏参拝来社。

三日　戸畑宗像会記念参拝六十名献詠歌会年後一時より。

四日　秋季職員視察旅行、天草方面へ。

七日　福岡市井上氏、色定法師一切経一巻奉納の件にて来社。

八日　宮城野部屋親方以下明武谷宇多川、広川、四季野花各関取参拝。

一〇日　旭興産株式会社五十名参拝。出光興産長浜新築工事御祓

宇都宮禰宜、升谷出仕奉仕。

一一日　午後より女子職員茶道講座。

一二日　責任役員視察旅行。

一四日　西電気境内水道工事

一五日　月次祭斎行。

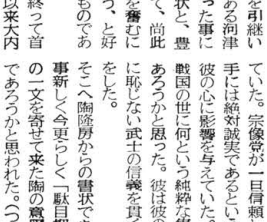
一七日　神社本庁岡田調査部長全吉田主事来社。

一八日　八幡製鉄殉職者慰霊祭久保宮司、葦津禰宜、杉本出仕奉仕。

一九日　宗像郡神職支部会斎藤権禰宜出席。

来年の干支守り〝龍〟

今年より当社で授与している刀彫りの干支守り兎は非常に好評を博した。当社ではこれより先、毎年の干支に因んだ一刀彫りの逸品を希望者に授与することにしている。来年は辰年に当る。たつ彫に通ずる所から彫り物は〝龍〟である。龍は神霊な動物でよく雲を起し、雨を呼び天に昇ると云われる。



材質は楠、伊勢名工の作。

宗像大社御用　綜合印刷
有限会社　大和印刷所
宗像郡宗像町東郷　電話東郷27番

宗像四郎氏貞（十）

山下半可　作
福田長庵　画

絆（一）

抑々、陶家は大内の祖正恒がその昔朝鮮より本朝多々羅に渡海上陸して来た時に随従して来た名家であった。随従の名家は二氏で、陶、山口といったが、そのうちの陶家のみが大内家と命運を共にし、ここに二十九代を迎えていた訳である。実は陶房は猶子であった。先代の陶道喜には五郎という嫡子があったが、この五郎というのが主君大内義隆を窺った事が露見して、父の道喜の手によって殺されてしまった。そういういきさつがあった後に猶子として縁組から陶家に入って家督を継いだのが陶房であった。陶家にまつわる忌わしい〝絆〟が又しても陶房を巻き込もうとしているのであった。

人は一度疑われると、それを晴らすことは容易ではない。たとえ一時の疑念を晴らしても、何か事の起る度に人々が思い出す。無実の罪を晴らす為に何年何十年という長い間努力しても、努力すれば努力する程疑わしいことの反証と考えられ勝ちである場合も多い。今の陶房の場合がそれであった。彼自身には何の逆心もない。それに拘わらず家中ではまことしやかに逆心あるものの如く噂している。本人の知らぬ間に討手の君命が出ている、という情勢にさえなっている。これでは下手に騒ぎ立てることはかえって不利になることは分り切っている。相母武任の暗躍はこの間の事情を巧みに縫って行くものである。捕えられた武任がやがて釈放されていること、そしてその後の指向点が陶房に向けられたこと、そうさせた事の裏に誰かいるのではあるまいか。

ここまで考えて陶房がはっとした。御主君大内義隆？まさか御主君が自分を抹消しようとしているのであるまい——。いやそんなことはあるまい——。

「治部、治部はおるか」

「はい、唯今お呼び致しましょう」

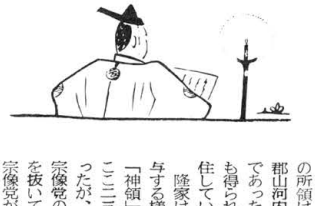
今さっき陶房の前を立った治部は、もう館内に於て富田への引揚げを指図していた。近侍の小姓が呼びに来たので又もや何かの変化があったのかと急いで陶房の前に伺候した。

「治部、富田へ引揚げる前に家中の杉隼人佐、石田将監、青景、鷺津の面々に富田まで足労してくるよう取計らうてくれ」

「承知いたしました」

曽我の裔（一）

ここ筑前国宗像郡西郷ノ庄に居住する河津掃部允隆家の館に陶隆房の急使が着いたのは、菜の花が



この国を一面に彩っている四月の中旬であった。

去る十六年（天文）黒川刑部少輔次男鎌寿丸被官の儀御心得成されしの条神妙此の事に存じ候大友、立花に対陣寧日之れ無き間、麁々馳走肝要に候猶軍忠到来の節進む可く候　恐々謹言

四月二十一日　隆房（花押）

河津掃部允殿

これは去る天文十六年に黒川鎌寿丸が父の正氏から武家領を引継いだ時の懸案を、大目付である河津隆家が手際よく取りしきった事について家老としての礼状と、豊州勢と対陣の労苦を謝して、尚此の上とも味方として忠勤を奮むにおいては御主君に進達致そう、と好意を以って伝達して来たものであった。

隆家は、今は大目付などというおこがましい職掌を念頭に置く事をつとめて遠慮したい気持になっていた。宗像党が一旦信頼した相手には絶対誠実であるという点が彼の心に影響を与えていた。この国の武士の信義を貴ぶ決心をした。

そこへ陶隆房からの書状である。

事新しく今更らしく「駄目押し」の一文を寄せて来た陶の意図は何であろうかと思われた。（つづく）

隆家は宗像宮を研究し、宗像大宮司家を調べて見た。そしてこれは容易ならざる「神領」という特殊存在であることを知ったのである。

隆家は、今は大目付などというおこがましい職掌を念頭に置く事をつとめて遠慮したい気持になっていた。宗像党が一旦信頼した相手には絶対誠実であるという点が彼の心に影響を与えていた。この国の武士の信義を貴ぶ決心をした。

そこへ陶隆房からの書状である。

事新しく今更らしく「駄目押し」の一文を寄せて来た陶の意図は何であろうかと思われた。（つづく）

に味方して軍功を励み、去年の暮には大内義隆の諱を貰って河津次郎を隆家と改めた程の者であった。父の隆業はまだ元気であったが、今は成人した隆家が西郷ノ庄の亀山に小城を造って所領をとりしきっている。彼は先年来、宗像の事が多い故、宗像宮の神領保全のために陶の仲介によって宗像郡六万石の大目付を命ぜられて今日に至っている。彼は忠実に責務を果して来た。神領の大目付として宗像党と提携することは、彼自身の所領六百二十余町を保全する為にも有利であった。もともと河津の所領は長州豊田郡田耕邑と厚狭郡山河内邑、周防国吉敷西中村等であったが、最近は山口勤番の暇も得られず、ずっと西郷ノ庄に居住していたのであった。

隆家は宗像大宮司家のことに関与する様になってから、宗像宮の「神領」というものを認識した。ここ三年大きな軍事行動は無かったが、これ迄にいつの戦いにも宗像党の戦いぶりというものは群を抜いていた。同じ態勢なら必ず宗像党が強かった。その強さが異常である事に隆家が気がついたのは彼が大目付になって間も無くであった。

八幡製鉄起業祭

―"鉄の都"にぎわう―

さる十二月十七日、北九州の秋をいろどる"鉄の都"八幡製鉄の起業祭が三日間にわたって行なわれた。これは北九州工業地帯の中心になる八幡製鉄の創業記念日を祝うお祭りで、初日以来二数年見られないにぎわいを見せた。日曜日でしかも行楽日和に恵まれたためとみられるが、暖かい日がさす大谷広場には大きな奉祝塔のまわりに、サーカス小屋や、見せ物が並び、はなやかな飾りつけの道すじは数百の露店や植木市で埋まり、北九州各地から見物に集った家族づれなどでごった返した。

なお十八日は恒例の招魂祭が、八幡製鉄体育館に於て盛大に斎行された。

宗像大社から久保宮司、葦津祢宜、杉本出仕が出向、そのほか八幡製鉄の守護神である高見神社波多野宮司を初め近隣の神転五十数名が奉仕して、高雅絢爛たる祭儀が行なわれた。

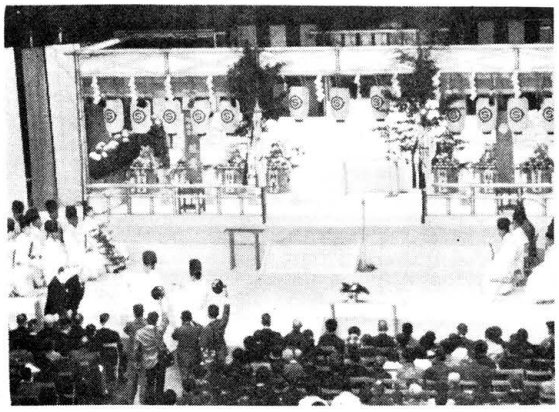
午前十時、斎主久保宮司以下列立、式場に参進、二千名の参列者の中を静々と祭壇に向う。

やがて典儀の開式の辞が述べられ儀式が初まった。三十二台の大きな三宝には、菓子、ビール、キャラメル、煙草など、殉坑者の生前をいとおしむ数々の神饌が献饌され、殉坑者の招魂にふさわしい祭りであった。献饌を終り斎主の祝詞奏上が初まる。製鉄所開所以来、二千柃林の霊やすかれと祈る言葉に遺族席からは敬虔な祈りと安らぎが感ぜられた。

所定の神事が終ると引続き、斎主親教が行なわれた。久保宮司が演壇に立ち、或る会社の社長の信条を説明　人世一にも二にも努力が必要――祖先に対する最大の祭りは業を励み人の為に尽すにある旨のお話しが行われた。

鉄の都に生き鉄の都にいのちを捧げた殉坑者の霊も、この熱誠あふれる祭儀によって慰霊された事であろう。盛大なる祭儀が行なわれる時代は発展する事業が期待される。

日本の基幹産業である八幡製鉄の大いなる躍進を心から祈ってやまない。



消息

謹啓　秋冷の候愈々御清栄の段慶賀の至りに存じます。

「宗像」紙毎号御送付頂きお陰で郷里の模様や郷土の先輩諸彦の御活躍の様子を拝承出来て嬉しく存じて居ります。益々御発展のますよう遥かの地から祈っています。

尚、私儀日沼自治大学校主幹として勤務しておりましたが、この度自治省消防庁予防課長を命ぜられました。菲才の身ではありますが、更に懸命の努力を尽す所存でありますので郷土宗像関係の皆様の相変りませぬ御指導御支援をお願い申し上げる次第でございます。

この度左の所へ転任しましたのでよろしく御願いします。

筑紫郡太宰府町太宰府東園　井上猷三

貴大社機関誌「宗像」一年度ありがたく拝読させていただいております。御礼申し上げます。

東京　伊規須徳博

謹啓　秋冷の候益々御清栄の段慶賀の至りに存じます。

「宗像」紙毎号御送付頂きお陰で郷里の模様や郷土の先輩諸彦の御活躍の様子を拝承出来て嬉しく存じて居ります。益々御発展のますよう遥かの地から祈っています。

尚、私儀日沼自治大学校主幹として勤務しておりましたが、この度自治省消防庁予防課長を命ぜられました。菲才の身ではありますが、更に懸命の努力を尽す所存であります。郷土宗像関係の皆様の相変りませぬ御指導御支援をお願い申し上げる次第でございます。

この度左の所へ転任しましたのでよろしく御願いします。

筑紫郡太宰府町太宰府東園　井上猷三

貴大社機関誌「宗像」一年度ありがたく拝読させていただいております。御礼申し上げます。

東京　伊規須徳博

謹啓　秋冷の候愈々御清栄の段慶賀の至りに存じます。

「宗像」紙毎号御送付頂きお陰で郷里の模様や郷土の先輩諸彦の御活躍の様子を拝承出来て嬉しく存じて居ります。益々御発展のますよう遥かの地から祈っています。

尚、私儀日沼自治大学校主幹として勤務しておりましたが、この度自治省消防庁予防課長を命ぜられました。菲才の身ではありますが、更に懸命の努力を尽す所存であります。郷土宗像関係の皆様の相変りませぬ御指導御支援をお願い申し上げる次第でございます。

この度左の所へ転任しましたのでよろしく御願いします。

筑紫郡太宰府町太宰府東園　井上猷三

貴大社機関誌「宗像」一年度ありがたく拝読させていただいております。御礼申し上げます。

東京　伊規須徳博

謹啓　秋冷の候愈々御清栄の段慶賀の至りに存じます。

「宗像」紙毎号御送付頂きお陰で郷里の模様や郷土の先輩諸彦の御活躍の様子を拝承出来て嬉しく存じて居ります。益々御発展のますよう遥かの地から祈っています。

尚、私儀日沼自治大学校主幹として勤務しておりましたが、この度自治省消防庁予防課長を命ぜられました。菲才の身ではありますが、更に懸命の努力を尽す所存であります。郷土宗像関係の皆様の相変りませぬ御指導御支援をお願い申し上げる次第でございます。

この度左の所へ転任しましたのでよろしく御願いします。

筑紫郡太宰府町太宰府東園　井上猷三

貴大社機関誌「宗像」一年度ありがたく拝読させていただいております。御礼申し上げます。

東京　伊規須徳博

宗像大社献詠歌集刊行

―第一集―

当社の献詠歌会は、今年の春で満二周年を迎えた。これを記念して献詠歌集を作ろうということになり、着々と準備が進められて来たが、此の程漸く第一集が刊行された。

立石昇氏(宗像町教育委員長)の「はじがき」にもある通り

・この会は毎月第一日曜日開催

・前月末迄に献詠されたもの(四十―五十首)を鑑賞批評。

・流派にとらわれず、巧拙にかかわらず、自由に大胆に、ひたすら神に通ずるまことの表現を求める。

・ここに会員のとれ迄の詠草中から各自二首を撰じとなっている。二三例をあげると

○いろ〳〵な半生を持つ吾ながら額づけは神幹し給ふ気がする　(井原　元彦)

○宗像の神に献ずる歌のつどひ他郷に老いしわが胸に泌む　(伊規須ゆき)

○許斐山大刀風荒れし日は遠くまうすらを眠る峯しづかなり　(白雲　山人)

○さがせども北斗七星見あたらず目うすくなりしを知りて家に入る　(林　まつえ)

○墨染の衣に秘めし煩悩を静かに堪へて南無観世音　(隣　船　後)

○ことの葉の落葉に埋るるわくらはを神も憂くしとかそなはすらむ　(織田　像雨)

○風呂焚きて帰りの遅き吾子を待つ幾の音のしきりなる夜　(立石ろせの)

○摘み草の切られ蹠られし樣側に子等姿消え春の日永し　(永島　計七)

○遅く来し孫等は帰りつまぐろの尚咲く庭にひとり水うつ　(永島八重子)

○宝の如福豆袋持ち帰り数へ分ちぬ春待つ今宵　(中野節子)

○軒近くうぐひすの声きく朝は雨戸繰りても暫ためらふ　(久保　房江)

○独逸へ郷が発ちより三日飛行機事故のありしを聞かず　(大和　虎雄)

○雪踏みて来し新聞配達の少年の頬あかくもえるし　(安部　重郎)

○雪山にだけは登るな子に宛てし封書がしかとポストに音す　(桜井　ツ子)

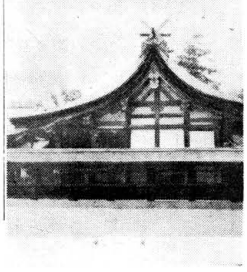
○玄海の冬の波間目にみつつ言葉絶えたる君に酒つぐ　(鈴木日出年)

○百姓われ生げるしるしありいのち燃えてすべらみことに来たてまつる　(皇居献米)　(村山　政雄)

歌集の体裁はA5版、本文六十九頁、出詠者七十九名、表紙は宗像大社本殿側面写真版アート紙。中扉に宗像大社万葉歌碑写真を入れてあり、あとがきは久保宮司の手になる。

ともあれ、神社が月例の歌会を開き、巧拙流派を問わずにこれを続け、それが凝って一つの歌集になったことが寿ばしい。一社の文化活動の一端を窺い知るに足るものといえよう。

写真は宗像大社献詠歌集　第一集



西鉄ライオンズ三選手参拝

枯葉が舞い落ちる十一月二十三日、パリーグ西鉄ライオンズの稲尾、和田、阿部三選手が当社に参拝した。これは稲尾投手が祝仏されるので、其の旅行安全をお願いに参られたもの。

小学生の母い子達は三選手を一目みんものと、早くから神門前で待っていたが、三選手車から降ると、どっと取囲んでこことと嬉しそうに見上げていた。折りから休日の事とて、各地からの参詣者達も三選手を見つけて、あれが稲尾投手、あれが誰それと時ならぬ野球談義を咲かせていた。

三選手は参拝の後、地元後援会の人々と一緒に神湊での歓迎会にのぞんだ。

中津宮御嶽宮の秋祭り

十一月十三日、うららかな小春日和に、大島中津宮の御嶽山上の御嶽宮秋祭りが行なわれた。

参列した氏子の婦人方はいずれも熱心な信仰家で、六十才、七十才と云う高令者ばかり、紅葉した坂道を一生懸命登って山上の社殿に到着した。一人〳〵玉串を奉奠、祭典を終了して中津宮社務所で直会を頂き、楽しい一日を過ごした。参列者は十数名で、人数こそ少なかったが、月並みの祭と異る篤志者の特色ある祭典であった。

景　眺望絶

鯛ちり、ふぐちりが絶好！

あけぼの荘

宗像郡玄海町神湊

電話　神湊　六六番

町村往来

(一面よりつづく)

武丸　立石ろせ

次ぎくに外語の流行るこの頃に明治生れのわれは戸惑ふ　吉留　山下しづえ

贈られし千羽の鶴の一つくに美はしの心偲びつゝ見る　陵厳寺　真鍋　万三

〃　鮎老いて今日も筆とる嬉しさよ　福間　井原　元彦

〃　ットの上の友を思へば　サア皆さん今日も一日お元気にテレビを聞いてお勤めに出る　田島　小野　迪夫

新しき神殿を拝むと集い来し遺族らの顔皆老いにけり　(宗像郡護国神社鎮座祭)　田島　白雲　山人

〃　陽だまりに宿なし蜂の飛び交ひて秋もゆくなりわびしくもあるか　原田　リノ

自動車の通るにまかせ土の減り石ころばかりとなりし往還　香椎　桜井　秀

〃　咲き委えて梢に小花は残すのみ夏の末のつまぐろの花　桜井　ツ子

秋祭すきてひそけき陽のひかり枇杷の小花にとぶ蜂のあり　田島　白雲　山人

配達の児をよびおこす午前五時ともに行きたし雨ふる朝は　京都　鈴木日出年

しるしなき恋もありてよしかの思ふ吾が年月は老いてあるかも

◇玄海町消防団長会議…1日午前10時、町役場。防火週間行事と39年度出初め式の行事打ち合わせ。

◇学校管理講習会…1―2日大島村。8月上旬、英彦山であった講習の報告指導会。小中学校長、町村教育長が出席する。

◇都町村対抗体育大会…2日午後1時、間中グラウンド。バレーボール、野球など。町村長会主催。

◇都内中、高校補導係協議会…11日午後3時から宗像署で開き、修学旅行など行楽季節の反省と、年末の補導対策を打ち合わせた。

◇魚のアバートづくり…玄海町と大島村は12日から沿岸の四カ所にコンクリート魚礁を建設する。三カ年継続事業。

◇町村長・議長合同会議…15日午前9時半、町村会館。【宗像高五十周年記念事業について】

◇コーラスの会…14日午後8時、津屋崎町青年研修所。同町青年団主催。

◇冬山登山の講習会…16日午後7時福間町公民館。冬山講習会と合わせて登山用具の展示会を行なう。福間町公民館主催。一般初心者の参加を歓迎。

◇宗像会誌編集会議…16日午前10時、町村会館。第二号編集について打ち合わせなど。

◇十代の文芸サークル結成…津屋崎町で吉野享志氏を会長に結成。備蓄の態勢は整っているか。寒心に堪えない。

◇宮地老人ホームの増築…1時、津屋崎町天神町の子供会で結成している【うしお会】―会長大神通代さんほか二十五人―が舞踊や花で老人たちをなぐさめた。

◇果樹栽培現地研究会…25日午後1時、宗像町東郷用山のミカン畑。郡車部農業改良普及所田中技師が指導。

◇長崎沖のイワシ漁に初出漁…鐘崎漁協の花田秀三郎さんら五人はこのほど長崎県五島の宇久島平港へ向かった。同港を基地に五島付近で約三ヵ月イワシ操業をする。鐘崎地区からイワシ漁で五島沖まで出るのは初めて。

◇県貸し付けイワシ検査…28日午後1時、大島村。福岡農林事務所畜産係が県貸し付けの二十頭について飼料管理状況調査と子ウシの育成指導をする。

(西日本新聞より)

宗像伝説　其の三十四

池田村安永九年の倹約令

所得倍増論は貧富の差をますます大きなものにするという賛否がある。これは物価が遼廓な騰貴する理由に、従って倍増論に余り関係のない階層の生活が急激に圧迫される結果を指すものらしい。

それはさて措き、ここ数年間、有史以来の豊作が続いている。鉄工をはじめとする第二次産業が不振である反面に第一次産業がある。農業が農村人口の漸減等の悪条件にもかかわらず、振興していることは有難い。農村の近代化の為に喜ばしいことといわねばならない。

ところが、豊作の連続という一つの結果は人間の努力、研究もさることを乍ら、大部分を支配するものは「天与」の条件に外ならない。もしも凶作が続いたらどうなるか。バカンス踊きどころの話ではなくなるのは目に見えている。

備蓄の態勢は整っているか。寒心に堪えない。

さてその昔、安永年間(約二百年前)の倹約令が宗像郡池田村(現在の玄海町池野)に残っている。それによると、連続豊作と泰平の世に馴れ過ぎた村民がぜいたくになったことを戒めたものである。

即ち、

○近年に幸って凶作も之れ無きにつき驕慢、自ら怠慢み。

○女の衣服櫛かんざし等甚だ目立ち、中略染模様美麗にいたし其の外一体の器物諸道具迄右によって、

○暴騰倹約をし、専に相守り、耕作出精、風俗改まり候様に

これを守らないと、庄屋、大庄屋ども、なおざりにした罪は重々不埒である。きっと倹約が行届くようになければならない。元禄年中以来、おかみから度々注意して来たことを改めて抜き書きをするから、庄屋は重々抜締るように。

もしも相背き候者は、本人は申すに及ばず、庄屋大庄屋組頭迄もその落度を組明するであろう。

と仲々手厳しい。封建時代に於てさえも人々は一寸懐が暖かくなるとぜいたくをした。現代の世相とひき較べて感慨なきを得ない。

その元禄年中の「お触れ書」は

一、歌舞伎、狂言を子供に習わせることを停止する。

一、衣類一切木綿地の布を着用せよ。余裕があってもぜいたくをしてはならない。

一、大きな寄り合いを度々催して費用を無駄にしてはならない。

一、大庄屋、庄屋、又一般の者も身分不相応な贅古事を弱ってつまらぬ見得を張ってはならない。

右のように見える。今の人から見れば「何を余計なことをいうか、自分の金を何に使ったって自由じゃないか」というかもしれない。又「人民を圧迫して搾り取ることばかり考えていたんだろう」というかもしれない。しかしそうとばかりもいえない。いつの世の指導者でも考えることは同じなのではあるまいか。民衆が豊に平和に暮らすこと、そして万一不測の事態になっても、不断の備蓄がそれを救うものであること、この見地から出たのがここに示した「倹約令」なのではなかったろうか。

泰平に馴れ過ぎると腐んだ水のように必ず腐る時が来る。

「気ニシナイ気ニシナイ」といってばかりいると、いつの日か泣いても追いつかないことになる。今は昔の連続。先例をよく考えてみたいと思う　(H)

宗像大社献詠 俳句作品集（十五）

福間　城野　苳雨
煙突のけむり真直に秋高し

津屋崎　西住喜三郎
日に曝す造品幾品浜小春

〃　毛利　夜潮
行きすりの海女振り返る浜の秋

〃　占部　河童
枯葉降る音か療院消灯後

〃　渋田　史外男
一枚の秋潮にハモニカ吹く少女

〃　井浦　良介
大輪の菊が首振る逆くに憂

〃　安部真佐子
児の寝息雨戸に止めて柿剥るす

〃　岩見佳代子
青みかん転がり灯る独身寮

〃　久羽　博史
鷹舞ふ天の一輪青ふかむ

〃　香立喜一郎
猟解禁五百羅漢を振り向けず

〃　吉野　享志
帆柱の黒塗り一点冬落暉

〃　勝田　光一
汽車が汽車押しゆき満月天心に

東郷　小野　淡坡
暮迫る取入れ牛の急がざる

〃　小野　花居
田島路を小雨そほふる七五三

沖ノ島　前田裔之助
泣いて来る児にもかまわず稲刈り女

（選　詠）

企業に於ける人つくり（五）

出光佐三

一般の経営者から見られて、定年制がないと、しまいには人間ばっかり多くなって、会社がつぶれるんじゃないかという質問がどんどん出てきますが、そういうことは私のところにはない。というのは、私はじめ社員全体で働いた利益というものは、大部分が会社の中に保留してある。それからまた信念的に言っても、家族として大家族主義を掲げて働いておるのにお前は年をとったから勘当する、出て行けと言うことができるかどうか。それからまた、人間が一生、一致団結して働いて、しかも老後が安定しないなんて、こんなばかなことがあるはずがない。例外はありますよ。ありますが、だいたいにおいてそんなばかなことがあるはずがない。一般の経営者は定年制がなければ会社は破産するんじゃないかとおっしゃるのですが、それは経営者のほうに非常なまちがいをやっておられるからである。それはその会社が二割、三割と高配当をして、これを自慢しておられる。これが大まちがいで自慢する事柄ではない。これは従業員といっしょに汗水流して働いて得た結晶をよそに出しておるということであり、従業員の搾取ということなんです。

私のところに中小企業の人がよく相談に見えますが、そのときに事業がうまくいかないとぼやきにたいして私が必ず問いかけることは、あなたは高利のカネを借りたでしょう、高利貸からカネを借りたでしょうということです。これはもう百発百中です。その高利の金が儲もって、無理をするようになって、破産にいたっておるというのがほとんどです。ところが先に言った一般の経営者が二割、三割を配当しておられるということは、つまるところ外部にたいして二割、三割の高利を払っておるということなんです。だれがその高利を取っておるのかということになりますが、いま株を買った人はそんなに高い利回りは得られない。せいぜい七分か八分である。最初に株を買ったいわゆる投機家が高利を得ているわけである。株屋がもうけている。無意味な話です。そういうことで、社員の働いた利益を外部に出しておれば、これは社員の老後が安定しないのは当然である。

これも偶然最近わかったことでありますが、私は四十年も前から株の配当というものは、一割五分くらいを最高とすべきものである。ということを言っておる。

カネの力にも限度がある。

配当は一割五分くらいであるということを言って、高く配当することをいましめておる。これは私が拝金思想でなかったということであり、いわゆる働いた人に報いるべきであるという思想から出ていると思うのです。現在の状態であれば配当は一割か一割五分ぐらいにすべきで、それ以上の配当はもうけしからんというような観念になるわけなんです。そういうことで、私のところには定年制はありません。

それならば、仕事はどういうふうにして与えておるかということですが、これは五十四、五でもうボケたような者がいますから、そういう者はギアからはずさなければならない。経営というものはたくさんのギアがずっと回っているんですから、一つでも壊れたギアがあれば早くはずさなければみんなが迷惑する。私はこれで七十九才だけれども、やめろといわれないところをみると、まだギアが錆びていないらしい。そういうことで、実際に仕事ができるかできないかが問題で、そこに置いておってはうまく回転しない人は楽隠居をさせる。これは贅沢をさせるという意味ではありません。楽隠居をさせて余生を楽しませる。そして会社全体がその面倒をみて、家族の二隠居さんとして、余生を楽しませるということになっておるわけなんです。クビをきったり、定年制を設けなければならぬ必要性は一向にないんです。それでクビをきらず、やめさせない。

定年制がないとなれば労働組合なんかあるはずがない。労働組合は出来ません。私の会社には、労働組合からずいぶん働きかけてくるけれども、若い社員に逆に説法を食って帰らせられるんで、このごろはぜんぜん諦めてだれも寄りつかない。私からいえば、私がむしろ社会主義を実行しているんじゃないかと言いたくなるわけです。そこで対立闘争というものは一つもない。

2 出勤簿がない

それからもう一つ出勤簿の問題です。これは人をばかにした話で、いちいち出勤簿をとらなければお前たちは信用できないなんて、ばかな話です。だから出光では出勤簿をはじめからとっておりませんが、なんら差支えないのみでなく、若い人は、出勤簿をとらないぞといえば、われわれはそれ以上に応えますよと言う。これが日本人です。（つづく）

宗像誌 この年をかえり見て

―社報として再発足―

―お末社の春雪―

あと幾何も無く過ぎ去って往く昭和三十八年、いや一九六三年と云った方が良いのかも知れないが、この年は、我が宗像誌にとっても決して平穏な月日ではなかった。

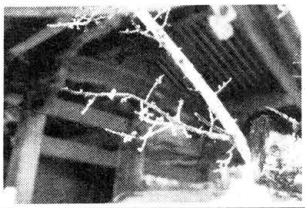
折節の移り変り目に、この一年を振り返って眺めてみたい。

元旦は小雪に明けた。この地方では曾てない天候異変を見舞われて、何十年振りかの寒波がやって来た。それでも除夜の鐘が響く頃から延々と参拝者の車が続き、例年に変らぬ宗像不夜城を出現した事は、神徳の広大なる事の証左であろう。しかし、十日過ぎ、数十年振りの積雪には御祈願の車が国道から当社まで来る事が出来ず、静かな一日を過した事があった。

明けて二月、長編小説「鐘の岬」が完結した。

当郡鐘崎の沈鐘伝説及び当社秘宝翁面をモチーフとして、当社中興の人大宮司興氏の一時期を描いたこの小説は、反響呼ぶ処多く郡史他引用文献等其誤のものもあって、一部には史実と混同された向もあったが、あくまでもフイクションである事をお断り申し上げておきたい。

この後、同じく山下半司氏は書きおろし長編「宗像四郎氏貞」を寄せていただいている。倍日の御支援をお願いしたい。この頃、胃潰瘍で入院中の当社宮司の容態が快方に向った。それはあらぬか日異先生病床に伏してつれづれなる侭に漫筆を振い、紙面を賑わせた事があった。この記事によって各位から暖い御見舞を戴いた。宮司、職員一同感謝する次第である。

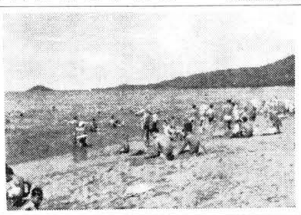


―社頭の紅梅―

三月には昨年より復活した御生祭の熱行に伴なう海洋神事奉賛会が沿岸七浦漁業関係者を主軸として結成された。この頃、海上自衛隊金鑑船に当社海上安全の御守りが奉斎せられた事は特筆されるべき事であろう。

菜の花が咲き乱れる頃、懸案の宗像郡宗像会再結成の問題が具体化した。昨年頃より活潑化して関係者間で討議されていたが、この程ついに発足に踏み切ったのである。斯くて宗像郡宗像会は独自の会誌を発刊する事に決定した。想えば当「宗像」が発刊されたのは、各宗像会の機関誌として遡隋の郷土出身者に郷土の近況を伝え、親睦と融和を計らんが為であった。

この度の宗像郡宗像会が会誌を発刊するのに伴い、機関誌「宗像」は、二年数カ月で其の使命を完うしたと云える。以後、当「宗像」は宗像大社社報として継続して発行する事に決定し、神徳発揚を目指して現在に至っている。



―神湊海水浴場―

五月初頭、本紙小説の挿絵を担当していた深田無庵画伯が伊勢の地に転住され、繊細なカットが本紙から消えた。代りに福田長庵画伯に以降のカットをお願いした。

五月には、当社古文献に残る五月祭を復活、郡内神転の参加を得て厳粛に斎行出来た。

又、東郷駅東口に当る当社大鳥居が道路拡張の為神湊に移転した。神湊に頓宮用地を買収、再建される予定であるが、諸般の都合により建設位置が定まらず其侭になっている。

初夏の暑い日射しが照り始める頃、度々報じている宝物館について設立趣意書及び之に収蔵する沖ノ島神宝類を解説して天下に公開した。有名会社等各方面にこれが送られ、各社から多大の賛助を戴いている。斯くして八月炎天下に宝物館起工式が行われ、建設の鎚音高く第一歩を踏み出したのであった。本号一面掲載の如く只今外廓が出来上った。間もなく完成する事であろう。今後共各位の御支援をお願いする次第である。

―稔りの秋―

玄海海辺に秋風が爽やかに通う歌集「老い夫」を紹介した。

歌風の巧拙は省く、連綿として細やかな夫婦間の愛情を滲ませたこの歌は、読む者の胸に熱いものをこみあげさせずにはおかなかった。大方の感嘆と同情を博したものは明瞭なる論理ではなく巧拙を越えた愛情の吐露であった。

社報となった宗像の現形式を其侭継続して行って良いと思案されていない。愛読者各位の御支援を得て増々向上させてゆきたいと考える。大方の御叱責をお願い申上げる次第である。

以上走馬燈の如く、浮び消えゆく端々を綴って編輯部の想い出の記としたい。

宗像藪庵先生百話

スマトラの衛生的土俗（五）

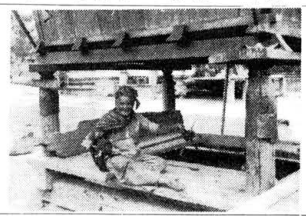
宗像太郎坊

インドネシアの島々では、割礼の儀式を、スナ（Sunat）と称して、重要な儀式である。チンコ切りの儀式が重要とは、一寸ユーモラスではあるが、宗教上、厳粛なものである。

当日は男の子、或は女の子を盛装させて、近くの寺院に詣りを、親戚や知人の宅を訪れ、割礼式の事を告げて帰る。年令は地方で異るが大体七、八才の頃である。その後、割礼に経験のある者（各村に一人は居る）が来て竹を削って作ったメス代用品か、小刀で包皮の先端を切りとる。女であればクリトリスに傷をつける。傷あとには花の粉や、植物の芽などをつけておく。我国でも昔、割礼を行った地方があるらしく、九州の某地では、これに用いた茅を今でも「カリキリガヤ」と呼んでいる。

話しは少しそれるが、北九州で、男子は七才、女は五才になると一つの儀式を持つ。前者は「ヘコカキ」後者は「ヒモトキ」と呼ぶ。一つの成人式の残りだと思う。男の「ヘコカキ」とは、褌をつけるの意で、女の「紐とき」は、さて何んと説明しましょうか。

扨、東印度の原住民八千万の内、七千万は、回教徒で儀式の日、太鼓を鳴らすと、割礼をする関係者が、式場に集り、手術師を待つのである。この専門家を、トッカン・スナ（Tukang Sunat）と呼んでいる。この者は、予め包皮の先を糸で縛っておいた子どものペニスを礼拝して、厳かな呪文を誦えながら、その包皮を切りとる。



この手術は子どもが年をとっている程、困難となる。傷あとには色々の薬があるが、粘土に、明黄や油煙などを混じた皿どめを塗っておくだけである。切り取った皮は割箸様の物で挟んで乾かして大切に保存している。

こうした式が終ると、この式場より自宅までは、妖しい童楽隊の先導で立派な行列が続いて行くが、その次きには先ず、五彩の色紙で飾られた馬車が続く。車内には冠姿の、包皮を切られた子どもが痛さのために、泣きべそかいて乗っている。その車の前後には美しく組み盛られた菓子と果物を捧げた子どもが数人従っている。一方家の方では、鶏や山羊を持つようになる事がある。（続）

豪華な料理がつくられ、行列の到着を待っている。終後、音楽を奏して寡が張られるが、七日間は燈火を消しては不吉とされている。小女の場合は、ピダン（Bidan）と呼ばれる女の呪師が、クリトリス或は、これの包皮に傷をつける（この程度は色々ある）。祝の御飯は、クルクーマと呼ぶ植物の根で、黄色に染めた飯をたべが、これは、わが国で、芽出たい時に赤飯をたべるのと同じ主旨である。

セーラム島原始人の間では女の子に、ひどい傷をつけるが、この辺りの部落に行くと、よく木の小枝で腰巻の前を下から持ち上げて、傷と布とが触れ合って痛むのを防いでいる珍妙な限を見る。こうした割礼がセックス刺激と関連